

4 主要作物生育、作柄の概要

1) 農作物生育状況

(1) 普通作物

① 水稲（平年並 作況指数100 県北部100 県中部99 県南部99） 農林水産統計より

[早植栽培]

（経営技術課情報より）

- ・育苗期間中の平均気温は、4月中旬を除き平年より高く、日照時間も長く経過した。これにより、苗は平年よりも短く、やや重くなった。また、病害の発生は少なかった。
- ・5月中旬～6月第1半旬は、高温・多照・少雨で経過した。これにより2日程度生育が進み、生育診断値（葉色×莖数）は大きくなった。今年は移植後の好天により苗の活着、その後の根の伸長が早く、速効性窒素を効率よく吸収できたことが要因と考えられた。
- ・6月下旬～7月上旬は、気温、日照時間も平年並となったものの、期間全般でみると、平均気温は平年並～高く、降水量は平年並～多く、日照時間は平年並～多く経過した。
- ・出穂期は平年より7日早い7月28日となった。出穂期（7月第6半旬）以降、8月上旬は高温・多照・少雨となり、昨年同様、今年も登熟期間の高温が想定されたが、中旬以降は一転し、特に8月下旬～9月上旬は低温・寡照・少雨となった。9月中旬は、気温は低かったが多照・少雨で、収穫に望ましい天候となった。
- ・成熟期は平年より7日早い9月9日、登熟日数は43日でほぼ平年並であった。

[普通植栽培]

（経営技術課情報より）

- ・育苗期間中の平均気温は、高温・多照で経過した。前作の麦処理の遅れから、移植は用水不足により遅れた25年度と同様の進捗となった。
- ・移植後～7月上旬の気温、日照時間は平年並であったが、降水量が平年よりもかなり多く、これにより地温上昇が妨げられ、下位節からの分げつ発生に影響した。
- ・7月は、草丈は平年よりも低く、莖数も少なく、葉色は淡い状態であった。しかし、梅雨明け後の好天により生育が回復し、莖数は平年並となり、生育診断値は回復した。
- ・出穂期は平年より1日早い8月26日となった。
- ・出穂後は9月上旬まで低温・寡照状態が続き、出穂後25日の登熟歩合は平年よりかなり低くなった。しかし、中旬以降は収穫期まで日照時間は多くなり、出穂期以降の葉色が平年よりも濃く、稲体の活性が維持されたことから成熟期の登熟度が高まった。

表 主要品種の生育概況（生育診断ほ平均）

（経営技術課より）

品種	出穂期			成熟期			登熟日数			登熟歩合(%)			収量(kg/10a)		
	H26年	平年	差	H26年	平年	差	H26年	平年	差	H26年	平年	差	H26年	平年	比
コシヒカリ (早植)	7月28日	8月3日	-7	9月9日	9月15日	-7	43	43	0	80.1	82.0	-1.8	55.9	57.5	97
あさひの夢 (普通植)	8月26日	8月27日	-1	10月13日	10月14日	-2	48	48	0	84.9	80.0	4.9	61.4	53.3	115

参考：品質の概況

- ・1等比率コシヒカリ96.0%、あさひの夢97.7%、なすひかり95.2%、とちぎの星97.7%
(平成26年10月31日現在 農水省調べ)
- ・2等以下格付け理由の上位は、胴割粒39.5%、心白・腹白粒29.5%、カメムシ類11.0%
(平成26年11月30日現在 全農とちぎ調べ)

② 麦類（平成26年産）

（経営技術課情報より）

収量(対前年比) 小麦：94 二条大麦：56 六条大麦：43

農林水産統計より

- ・播種の50%到達推定日は、県全体で11月15日と昨年より1日遅く、県北で特に遅れた。遅れた原因は、10月下旬のまとまった降雨の影響によりほ場の準備が進まず、また播種時期に2～3日おきに降雨があったことが影響した。出芽はほぼ順調で、県平均の苗立ち数は平年より多かった。
- ・12月18日時点の莖数で見ると県平均で平年よりやや少なく、播種の遅れたほ場は分けつの開始が遅れた。
- ・年明け以降も低温が続き生育は遅延し、2月18日時点の莖数は少なく、平年に比べ7日～10日の遅れであった。なお、2月14、15日の大雪の影響により、一部では湿害の発生が見られた。
- ・2月下旬に気温の高い日があり、3月18日時点の莖数は平年より少なかったが、2月調査より回復傾向となり、莖立期は平年に比べ7日程度遅れた。
莖立期以降も気温が高く推移し3月時点より生育の遅れは回復し、出穂期は平年並～1日早であった。穂数はやや少なく、特に播種の遅れたほ場を中心に穂数が少ない傾向であった。
二条大麦の収穫作業は県南で5/23から県北で6/2から始まったが、6/5からの連続した降雨の影響で、収穫作業の進捗率は前年より1～2日遅くなった。
また、この降雨に伴い、県内全域で未収穫の二条大麦と六条大麦を中心に、穂発芽や黒かび等の被害が発生した。
- ・降雨前に収穫した二条大麦および六条大麦の外観品質は良好で、平年並みの単収であった。一方、降雨により穂発芽が発生した麦は、品質が低下し規格外となったり、堆肥化等により処分した。
小麦は、極僅かであるが穂発芽や黒かび、赤かび病の発生したほ場が一部で見られた。また畑地の連作ほ場を中心に、なまぐさ黒穂病の発生が確認された。

③ 大豆

（経営技術課情報より）

- ・播種作業は、平年同様6月中旬から始まったが、6月下旬～7月上旬に降雨が続いたため、7月中旬にずれ込んだ圃場が見られた。播種後のまとまった降雨により一部で出芽不良となり、播き直したほ場があったものの、出芽は概ね良好であった。
- ・梅雨明け後の高温・多照により初期生育は順調であったが、播種の遅れた圃場では生育遅れが見られた。
- ・開花期は、適期に播種されたほ場では8月上旬頃と平年並みであった。
- ・8月下旬以降平年に比べ気温が低く日照時間は少なく推移し、主莖長は平年よりやや短く、着莢数は平年並であった。
- ・10月6日に台風18号が、10月14日に台風19号が通過し、一部でなびき倒伏や冠水した圃場が見られたが大きな被害には至らず、収穫期は10月下旬から始まった。
- ・以上、品質・歩留りが平年より良く、収量は平年並～やや良の見込み。

(2) 野菜

① いちご

- ・平成 26 年産本ぼ (並～やや不良 生育期間：平成 25 年 9 月～平成 26 年 5 月)

花芽分化は、梅雨明けが平年よりも 15 日早かったため、夜冷育苗では概ね平年並であったものの、その他の作型は 8 月の高温の影響により平年並～やや遅い状況であった。定植作業は概ね順調に行われたが、11 月中旬の低温により生育が遅れ気味のほ場が見られた。頂花房の花数は平年並からやや少なかった。また、1 次腋花房の開花は平年並からやや遅れた。作柄は平年に比べ並～やや不良であった。2 月には記録的な大雪に見舞われ、ハウスの倒壊等の被害出た。

病害虫は、炭疽病や萎黄病がやや多い発生であった。うどんこ病は 10 月から発生が見られ、平年並～やや多い発生となった。ハダニ類、アブラムシ類の発生は多い傾向で、特に、2 月以降は灰色かび病が多くなった。

- ・平成 27 年産親株～苗 (並 平成 26 年 5 月～9 月)

低温の影響によりランナーの発生はやや遅れ気味となった。また、高温により活着の遅れや植え傷みが見られ、各地で炭疽病の発生が多く見られた。うどんこ病の発生は梅雨入り頃から増加し、平年よりも多い傾向であった。ハダニ類は育苗初期からやや多い発生で推移し、同時に、本ぼ定植期以降は、アザミウマ類の発生が多く見られた。

② トマト

- ・冬春トマト (並～やや良 生育期間：平成 25 年 10 月～26 年 6 月)

越冬長期どり作型は、10 月中旬から順次収穫が始まった。1～2 段花房の果実はやや小ぶりだが、乱形果等は少なく品質は良かった。10 月下旬の日照不足の影響と考えられる空洞果の発生や 11 月の低温による着色の遅れが見られたが、年内から 1 月にかけては日照にも恵まれ、果実肥大、品質ともに概ね順調に推移した。

促成冬春どり作型は、日照に恵まれ、果実肥大、品質ともに概ね順調であった。

両作型とも、4～5 月にかけては日射量多く高温傾向で小玉傾向となり、葉巻症状や黄変果の発生が多くなった。

病害虫については、黄化葉巻病は全体的には平年並みの発生となった。灰色かび病は、2 月の雪害後に一時的に発生が見られたが、平年より少なかった。葉かび病は作付期間を通じて平年に比べ多く発生した。かいよう病については、6 月末時点では 20 ほ場で確認され、一部多発したほ場が見られたが、概ね軽微で拡大は抑えられた。

2 月中旬の大雪の影響により、ハウスの倒壊等、甚大な被害となったものの、総収量は前年比 98%と概ね前年並みとなった。

- ・夏秋トマト (並 生育期間：平成 26 年 5 月～26 年 9 月)

低段花房の肥大が良好であったが、中段以降はやや小ぶりとなった。また、高温により一部で着果不良が見られたが、作柄は平年並であった。病害虫の発生は全般に少ない傾向であった。一部のほ場でかいよう病の発生が確認された。

③ なす

- ・夏秋なす (並～やや不良 生育期間：平成 26 年 6 月～10 月)

4、5 月の小雨と乾燥で定植後の活着や生育が遅れた。また、平年より早い梅雨入りと多雨、

9月の低温により盛夏期を除いてヘタ白果やヘタ枯果等の障害果が例年より多かった。また、8月上旬の高温と中旬以降の日照不足で着果不良が見られた。病害虫については、カメムシ類、アザミウマ類の発生が多く、うどんこ病やハダニが散見された。

④ きゅうり

・夏秋きゅうり（並～やや不良 生育期間：平成26年6月～9月）

4～5月の少雨乾燥により側枝の発生が遅く、初期収量が少なかった。また、長梅雨の影響で6～7月も出荷量は少なくA品率は低かった。病害虫については、黄化えそ病、アブラムシ類、アザミウマ類が例年より多く、べと病が散見された。

⑤ にら

・冬どり（並～やや不良 生育期間：平成25年6月～平成26年5月）

定植は6月下旬までにほぼ終了したが、5～6月上旬の降水量が少なかったことから、初期生育が遅れた。夏期の高温・乾燥と台風による倒伏等の影響により、根株養成期における株の充実が不十分な状態となった。また、12月以降は低温と2月の大雪の影響で生育が5日程度遅延した。病害虫については、ネダニの発生は多く、白絹病、さび病が散見されたが、白斑葉枯病は例年に比べ少ない傾向であった。

⑥ ねぎ（並 生育期間：平成26年6月～11月）

梅雨入り直後の日照不足により生育がやや遅れ気味になるとともに、排水不良のほ場で生育が停滞した。また、盛夏期も高温により生育は遅れ気味となった。9月以降は気温低下とともに順調な生育となった。病害虫については、梅雨期及び秋以降にさび病が多い傾向であった。また、夏期にはアザミウマの発生が多かったが、気温の低下とともに平年並みの発生となった。

⑦ たまねぎ（並～やや不良 生育期間：平成25年9月～平成26年6月）

台風の影響で定植に遅れが生じたが、定植後は一転して少雨で活着が遅れるなど、年内の生育を十分に確保できない傾向であった。

12月～2月は平年に比べ低温で推移し、また肥大期に入ると圃場は乾燥気味で、例年に比べ生育は遅延傾向となった。玉の肥大については、早生種はやや小玉傾向であったが、中晩生種では概ね例年並の肥大が確保された。抽だいは例年より少なく、病害虫については、べと病が散見されたが、全体的に少ない傾向にあった。

⑧ レタス

・秋冬どりレタス（良 生育期間：平成26年9月～12月）

定植時期の低温と曇雨天により定植作業は順調に進んだ。また、適度な土壌水分で活着は良好であった。生育の遅れはなく玉の肥大も良好で、病害虫の発生は全体としては少なかった。

(3) 果樹

① なし (並)

催芽期は幸水で平年より3日早く、豊水は同日だった。開花盛は幸水で平年より2日、豊水で3日早かった。収穫期は幸水で平年より4日、豊水で7日早かった。収穫時果重について、幸水は平年より大きかったが、豊水は成熟日数が短くなった影響で平年よりやや小さかった。糖度は平年並だった。みつ症等の果実生理障害は豊水、きらり、にっこりで程度や症状に差があるものの、発生程度は平年並に少なかった。病害虫は、ニセナシサビダニ、カメムシ類の発生が目立ったが、その他は平年並だった。

② ぶどう (並)

巨峰の催芽期は平年より3日早く、開花盛は6日早かった。収穫盛は平年より17日早かった。開花直前の降雨の影響で結実がやや劣り、房重は平年よりやや小さかった。着色は平年並であったが、糖度は平年よりやや劣った。病害虫について、生育前半はカメムシ類の発生が目立ち、生育後半は晩腐病の発生が一部品種で目立った。

③ りんご (並)

ふじの催芽期は平年より1日遅く、開花盛は2日早かった。収穫盛は平年より2日早かった。結実、収穫時果重は概ね平年並だった。糖度は平年並、着色は良好だった。生育中期以降、褐斑病、斑点落葉病、炭疽病が散見された。害虫は、カメムシ類の発生が目立った。

樹種名	品種名	催芽期		開花盛		収穫盛		果実重	糖度
		月日	平年差	月日	平年差	月日	平年差	g	Brix%
なし	幸水	4/3	-3	4/23	-2	8/29	-4	469	12.0
	豊水	4/2	±0	4/19	-3	9/16	-7	453	12.0
ぶどう	巨峰	4/14	-3	6/4	-6	9/6	-17	225	16.9
りんご	ふじ	4/5	+1	4/27	-2	11/14	-2	309	15.3

注：催芽期、開花期、収穫期の平年差の-は、早くなったことを示す。

なしは過去10年の平均。ぶどうは1971~2010年の平均、りんごは過去10年の平均。

(農業試験場果樹研究室より)

(4) 花き

きく (並)

冬季は低温の影響によりボリュームが不足するほ場も散見されたが、ほぼ平年並みで推移した。夏季は8月下旬から平年よりも気温が低く推移したことで、開花遅延や奇形花の発生は少なかった。病害の発生については、白さび病は平年より少なかったが、一部の品種や換気が不十分なほ場では多発した。害虫の発生は、ハダニ類、アザミウマ類が平年並~多く、アブラムシ類は少なかった。